

物語の金字塔「源氏物語」

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講座「東京で学ぶ 京大の知」(朝日新聞社後援)。シリーズ1「王朝文学の世界」の2回目の講演が17日にあった。京大大学院文学研究科の金光桂子准教授が、王朝文学の代表作である「源氏物語」の魅力について、なぜ源氏物語が評価されるのか、他の作品にどんな影響を与えたかを読み解いた。

●王朝物語の金字塔



大学院文学研究科 金光桂子

物語のスケールの大きさ、はたんのない緊密な構成、個性豊かな数多くの登場人物と、その人物たちが複雑に絡み合う人間関係の中で見せる人情の機微……。

金光准教授が「ほめ上げればきりがない」という源氏物語は、言わずと知れた「日本の古典文学として最も著名で、世界にも名が知られた作品のひとつ」だ。

金光氏は、王朝物語というジャンルについて「平安時代の宮廷を中心とする貴族社会で成立し、流布した仮名文による虚構の物語」と位置づけたうえで、源氏物語について「王朝文学の歴史という観点からも非常に重要で、画期的な作品」と強調した。

それ以前に成立した物語作品とは大きく性格が異なり、以後に成立した作品には大きな影響を与えたという。そして、鎌倉時代に成立した物語作品の評論書「無名草子(むみょうぞうし)」の記述をたどり、源氏物語の魅力を再検証した。

●「源氏」貫くりアリティー

「無名草子」は、作品によっては辛口な論評で知られるが、源氏物語については違う。「源氏物語以降なら、この作品を手本とすることができる。しかし、源氏物語はこれと

いった先行作品もなしに生み出された。人間業とは思えないほどにすばらしい」と、最大級の賛辞を贈っている。

金光氏は、無名草子が、王朝物語の系譜を源氏物語の以前と以後で区別し、源氏物語を画期的な作品に位置づけた点に着目する。「無名草子は、作品の欠点をあげる際にしばしば『非現実だ』と指摘している。逆にいえば、源氏物語は現実的な内容である点が優れている、ということ」と推察する。

その根拠として、金光氏は、源氏物語以前の物語として有名な「竹取物語」や「うつほ物語」と比較する。

この2作品は、人間ではない天人や天女が登場したり、非科学的な自然現象が起こったりするなど、ファンタジー的な要素が多く含まれている。これに対し、源氏物語には現実離れした場面はほとんどない。六条御息所(ろくじょうみやすんどころ)の生き霊が登場するくだりにしても「なぜ生き霊が出現するのか、いきさつを丹念に書き、登場場面もリアルで迫真力ある描写がほどこされており、荒唐無稽(こうとうむけい)な印象はない」という。

金光氏は、源氏物語の中で紫式部が主人公・光源氏に語らせている言葉から、「紫式部自身が物語イコール絵空事という、当時の一般的な考え方から脱却しようとする意識を持っていた」と分析する。

非現実的な描写に対する批判的な論調から、紫式部自身は、当時人気があったうつほ物語などを読み込んだうえで、あえて別のスタイルを選んだことが読み取れる、と指摘した。



●心理描写に「源氏」の影響

講演の後半では、金光氏は源氏物語以降に成立した作品について触れた。一見すると、源氏物語で排除されたはずの、ファンタジー的な要素が再び現れるようになるという。その一端が、人気を集めた狭衣物語(さごろもものがたり)に表れていると指摘し、詳しく解説していった。

第一巻。主人公・狭衣が吹いた笛の音色の美しさのあまり、天人が現れて狭衣を天上へと誘う。結局、狭衣はこの誘いを断るが、後にこのことを悔やんで「残念だ」と嘆く。

金光氏は、「狭衣の『残念だ』という感情は、彼の心情を表す言葉として作中のいたるところに登場する。人生を象徴する言葉」と指摘。そして「この場面は、ファンタジー的な要素も含んでいるが、主人公の心理や生き方と非常に深くかかわっている場面でもある」と強調した。

源氏物語がリアリティーを追求したにもかかわらず、現実離れた描写の復活は、王朝物語の歴史からすれば「逆行」とも言える。

しかし、金光氏は、「荒唐無稽な、単に読者を驚かすような描写ではなく、主人公の心理や生き方を象徴するものとして描かれている点は、源氏物語を経由した成果」と解説した。

「源氏」「狭衣」の二つの物語は、主人公の不義密通と、その結果として主人公の子が生まれる展開が共通する。狭衣では、最終的に天皇の臣下の位である狭衣自身が天皇に即位するが、無名草子は「無理がある展開」と指摘した。

この点について、金光氏はこう推察する。源氏物語では、不義の子をもうけた光源氏と、その子である冷泉帝(れいぜいてい)が終生、互いに思い悩む。この「負の面」を、狭衣物語の作者は排除しようと意図したのではないか。光源氏ほどに不義について罪悪感にかられることがないよう、狭衣の性格や周辺人物の設定を変えたのではないか。

狭衣物語の作者は源氏物語を「現実」として受け止め、作品のストーリーの根拠にした。しかし、リアリティー重視の源氏物語もまた虚構の物語である以上、虚構に虚構を重ねることになって(狭衣物語の)非現実味が増したのではないか——。これが金光氏の結論だ。

金光氏は、講演をこうしめくくった。「源氏物語以降に成立した物語の作者は、源氏物語を一種の現実のできごととして受け止めたうえで、模倣したり、ストーリーの根拠に用いたりして乗り越えようとした。このように、後の時代に多くの物語を生み出す原動力になったという点でも、源氏物語は画期的な作品だった」

(※原稿及び写真は朝日新聞社提供)